平和のためにたたかう友好組合になりましょう

＝東独のラオハマ炭鉱の露天堀風景＝

ラオハマ炭鉱労組から三池へ

三池炭鉱労働組合のみなさんへ

親愛なる同志のみなさん！

わがコンビナートへ日本科学者代表団が訪問されたとき、その人たちとの話から資本主義の搾取と抑圧とたたかっている日本の炭鉱労働者の生活と闘争について知りました。

その話し合いの中で私たちは日本の炭鉱労働者とドイツ民主共和国の炭鉱労働者との間には多くの共通な利害があることを知りました。社会正義と社会保障ならびに労働者の生活の向上のためのみなさんのたたかいはすばらしいものだと思っています。

私たちはわれわれコンビナート一万二千名の名において血のかよいあった真の連帯を約束し、みなさんがより大きなたたかいの成果を得られることを期待します。

ドイツ民主共和国の炭鉱労働者は新しい社会の建設とヨーロッパおよび世界の平和の維持にとって非常に重要なわが共和国の強化のために大いに頑張っています。

みなさんも、われわれもともに反戦・平和のためにたたかっているわけですが、この平和維持ということこそ、世界中の労働者階級の、いつも変らぬ共通の根本的利害があると思います。

このように重大な平和をたたかいとるために、日本の炭鉱労働者とドイツ民主共和国の結びつきを恒常的なものにしようではありませんか。

この結びつきはたたかいと生活についての情報の交換という形でできると思います。

また、将来ご都合のつくときはいつでもわれわれの所へ貴労働組合の代表をむかえ、実地に交流をふかめるようすでに準備いたしております。

最後に全日本炭鉱労働者のみなさんが資本主義的搾取と抑圧、平和を守るたたかいに成果をおさめられることを期待します。

ラオハマ人民所有石炭コンビナート
ドイツ社会主義統一党第二書記　ルース
コンビナート労働組合執行委員会議長　カール

よろこんで受け入れます

三池労組からラオハマ炭鉱へ

ラオハマ炭鉱労働者のみなさん、みなさんのたたかいの報告と連帯の提案は三池労組の全組合員家族に大きな勇気を与えてくれました。

私たち三池のたたかいは、新しい社会秩序とヨーロッパおよび世界の平和のために奮闘しておられる貴労組のたたかいと根本的には同じであり、私たちの連帯はその目的をいっそう前進させると確信します。

私たちは全組合員、家族の名において貴労組の提案をうけいれ、最初のきづなとして写真と機関紙をお送りします。

さらに将来適当な時期に代表団を送りたいと思います。

お互いにがんばりましょう。

一九六六年十二月十九日
三池炭鉱労働組合
組合長　宮川　睦男

東ドイツと三池の交流を

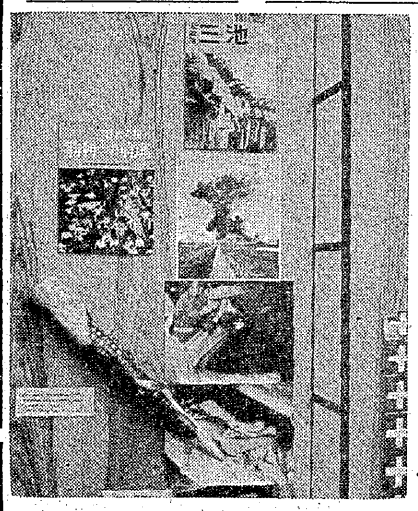
この秋、東ドイツの古都ワイマールで開かれた日本祭―日本国民との友好祭―に招かれて、奥田八二さんと訪独しました。その折、東ドイツの南部にある褐炭鉱ラオハマをたずねました。ラオハマは東ドイツだけでなく、全ヨーロッパにおける最大の褐炭鉱です。日産五万トンの褐炭を露天堀りで掘り、それを原料に、煉炭、コークス、ガス、電力などを生産している一大コンビナートであり、約一万二千人の労働者が働いています。

そこで交歓した折、奥田さんが三池のたたかいに寄せられた国際的な支援を感謝し、三池のたたかいとその現状を報告しました。

ラオハマの人たちは三池のたたかいに感銘し、三池のたたかいとわれわれのたたかいは共通し、堅い一つのきずなに結ばれていることを強調しました。そして三池の労働者とぜひ友好の提携をすすめたいというので、別記のようなメッセージを託されました。また「三池のたたかいを明るくするように」というので記念のカンテラを贈られました。

私たちは共通の目的に結ばれたこの両組合の堅い提携が深化することを祈念してやみません。

福岡日独友好協会事務局長　小島恒久



ワイマールの日本展に展示された三池の写真とホツパー・パイプ

「根性ものがたり」（1）

やる決心こそさき　それが無から有を生む

宮浦　緒方進さん

テレビの十一チャンネルが林屋三平の珍妙な司会でおくっていた〝踊って歌って大合戦〟に、われわれの五人の仲間が出演し、見る者のドギモを抜いたことがあるが、そのなかの一人がここに紹介する根性の人―緒方進＝馬渡地域分会長（機械工＝四十四才）である。

「バカげたあのような番組でもブラウン管を通して、三池の火を守りながら全国でたたかっているオルグの人たちに、今も三池の労働者が元気でやっていることを知ってもらうこと、また問題のマスコミに労働者が進出することによって、それを下から積極的にかえてゆくことの必要性を知ってもらいたかったこと、おまけにたとえわずかでも、活動資金として地域にもち帰ることもできるし、一石二鳥ということになります」

緒方さんは無類の活動家だ。それを証拠だてるものの一つが、四月の〝家族同伴花見〟からはじまって翌年の二月の〝観梅ハイキング〟に至るまで、ギッシリ書きこまれた地域の行事計画であろう。そのどの一つにも緒方さんが顔をつっこんでいないものはないのだから。「いろんなことを通じて心から結ばれることなしに本当の団結はありませんから、こんなことがやりたいとの意見が出たものはできるだけやりたいと思っています。それでも、資金のことがとかく問題になりますが、しかしやっぱりやることですよ。それが無から有を生み出す道です。昨年の夏こども会が〝おばけ大会〟をやったときなど、主婦会の皆さんが廃品回収をやったりしたものです」

――なるほど「無から有を生み出す」というわけか。

「私の根性の源泉ですか？　それは第一に地域の人々のささえ。第二に姉さん女房のささえです。（奥さんのつもりさんが三つ上の四十七才）マキ割りから何から、みな女房がやってくれますから、私として何の心配なしに地域の世話ができるのです」

緒方さんはこういうが、なおそれと共に、昭和四年宮ノ原鉱の落盤事故の際背髄を二カ所も打ち折りながら、いのちだけは助かったお父さんをかかえて、小学四年のときから早くも新聞配達をやって家計をささえなければならなかった、幼い頃の辛酸が、緒方さんの今日の原動力となっている点を、見のがすことができない。

元旦の〝団結拝賀式〟の席で、盃を交わしながら根性発揮を誓い合う緒方分会長（向つて右の人）

火花

オルグ民泊を読んで

一九六七年は政府・自民党と三井資本の人間性無視の殺人合理化攻撃の中で、COのたたかいを中心とした反合理化闘争によって、三池労組の団結はさらに力強く前進することと思います。私たち社青同東京地本はCO立法をたたかいとるためにCO患者の実態を訴え、署名とカンパの活動をたたかいの一つの柱にしています。

さて私も〝みいけ〟の読者の一人ですが、最近の〝みいけ〟に「オルグの民泊」についての意見が〝俺にも云わせろ〟の欄にのっていましたので、オルグといわれる私たちの立場から、是非一度発言させていただきたいと思います。

オルグの立場から

私の結論は、石田さんの意見に賛成する者です。

たしかに、赤字をだしてまでせいいっぱい接待したのに、ハガキ一枚の礼状さえ書いてこないオルグが多いこと。本当に三池の仲間のたたかいを理解し、自分のたたかいの糧にする人がどれだけいるかという疑問。感謝をこめて接待すればするほどそうした考えになることは日常生活の中で考えても、十分考えさせられます。

しかし逆にオルグという立場にたって考えてみていただけませんでしょうか。

なぜ三池に行くのか

私たちは、東京からでも大牟田まで一万円の交通費が必要です。簡単にとなりの町や市にでかけていくようなわけにはいきません。

――オルグ民泊によせて――

三池の火いつかは炎に　全国の仲間を信じて下さい

東京　吉野信次

オルグ民泊によせて

何カ月も前から、三池にまなぶことの意味を職場の仲間一人ひとりに訴え、カンパを集めます。

なぜそれ程までにして、九州まではるばるでかけていくのでしょうか。北海道から東北から、はるばる三池にでかけていくのはなぜでしょうか。それは全国のたたかう仲間が職場の中で、信頼できる幹部もあまりいず、孤立しながらも、いまのままの組合ではいけない、本当に組合員のための組合にしていくにはどうしたらよいか、不屈のたたかいをしている三池の仲間からなにかをまなびとることができるだろうと真剣に考え、決意を固めてでかけていくのです。

一人ひとりでは弱さをもった人間が、たたかいをとおしてたくましい労働者に成長していくその過程を一回まなぶことは、百回の講義にまさるものと思います。そしてまたそのことが、私たちがたたかいの中で悩み、苦しみ、失望するとき生き生きとしてよみがえってくるものだと思いますたしかに礼状をださずにすごしてしまう人がいても、しかし三池にでかけていく仲間一人ひとりが必ず考えていることと確信しています。

正しい路線あるかぎり

いま三池の火は、三池のみなさんが期待するほどの炎となってはいませんが、ほそぼそと燃え続けています。その三池の火は、いまは少々の風でも消えそうですが、しかし全国の仲間はその火を真剣に消すまいとして守り続けていることだけは信じて下さい。

東京の仲間は、三池にかけられてきた攻撃と同じ活動家排除の東交不当処分撤回闘争を被処分者を守ってたたかい続けています。五十才ほどの職場の仲間はCO署名を百名もあつめて私にとどけてきてくれました。私たちの活動も組合員の利益を守ってたたかう中に多くの組合員もともにたたかいの戦列に参加してきてくれています。どんな小さな火も正しい運動の路線である限り、炎となる日が近くくることでしょう。それを信じて私はたたかい続けるつもりです。

以上がオルグといわれる立場の者としての、私の意見です。（別の問題についてのご意見は、割愛させていただきました＝編集部）

東京都新宿区柏木四ノ六六五
大山方　吉野信次